

える。人の痛み、悲しみが癒されることができるのは、ちょうどキリストがラザロスの墓前でしたように、他者が痛みや悲しみを適度な仕方と自分と共に感じてくれること、まさにその点にあるだろう。それゆえ、パシレイオスにおける二つの非常に異なった文脈、すなわちアパテイアとメトリオパテイアは、キリストにおける神性と人性のように、両者矛盾するものではなく、むしろ両立可能であるとひとまずは結論づけることができるのではないだろうか。

ラテン教父におけるストア派倫理学の受容と変容

荻野 弘之

序 影響史と比較的方法論

ストア哲学と教父の関係には、複数の循環や「ねじれ」が伏在していて、思想史理解のアナクロニズムを避けるためには、平板な「概念史」や「史料研究」だけに尽きない慎重な方法論的反省を必要とする。東西教父におけるストア哲学の影響・受容史は、プラトン主義の場合と同様に、ギリシア哲学の概念や発想がキリスト教神学に摂取・統合されていく過程において順接と逆接の両方の面をもっていたし、またその比重は個々の教父の場合でかなり異なっている。そもそもパウロが第二回宣教旅行の際、アテネで論戦を交えた相手は当時を代表する「エピクロス派やストア派の哲学者たち」であったが(Act. 17:18)、他方その書簡に散見される徳／悪徳の理解にはすでに同時代のストア派の深甚な影響が刻印されている。つまり批判する側とされる側とが「キリスト教対ストア派」といった単純な二項対立的関係に収容しきれない重複と余剰を孕んでいるのである。同様の事情は、中期プラトン主義の影響下にあるユスティノス、フィロンやグノーシス主義文書においても共通する問題であろう。

さてラテン教父に関していえば、近年ではマルシア・コリッシュが指摘するように、従来のストア哲学の影響史研究においては、ラテン・キリス

ト教著作家の役割がともすれば受動的な古代思想の「配達人」もしくは「保管者」としてしか評価されない傾向があった¹⁾。たしかに教父たちは、中立的な立場に立ち客観性を旨とする冷静な記録者・研究者ではなからう。むしろ各人が時局ごとの思想的な課題に直面しつつ、しかも一人の著作家が同時に政治家、教育者、論争家、司牧者といった複数の立場から発言している場合も多く、その意図的な読み替えの操作や論争の状況などテキストの文脈を精確に見極める必要がある。

また教父が引用・参照しているストア哲学の基本概念や発想は、新プラトン主義やアリストテレス哲学との折衷的な形態をとることが多く、その中から「ストア的要素」だけを純粹結晶のように取り出す作業は、必ずしも一般に予想されるほど容易ではない。実際3世紀のプロティノスにしても、そのテキストの表層には、プラトン主義の流れのただ中に、ストア派の用語や発想がいたるところに見え隠れしているのである。

キリスト教文学の中で、ストア哲学の基本概念は論争や批判の武器としての役割をも果たしていた。つまり異端であれ異教であれ、教父たちにとって誤った（と考えられる）神学的立場を論駁するための装置として機能するのであり、だからといってそれを信奉していたとは限らない場合も見受けられるのである。テキストの置かれた前後の文脈を重視すべきはこの点である。

さて問題をラテン教父に限定した場合、ギリシア哲学がローマ世界に移植されるにあたって「ラテン語」著作家としてのキケロやセネカが果たした役割はきわめて大きい。例えばキケロの『義務論』(*De officiis*)がアンブロシウス『聖職者の職務』(*De officiis ministrorum*)に与えた影響は「枢要徳」(*virtutes cardinales*)という概念の成立、また義務の主要な源泉としての「智慧」(*prudentia*)の役割を通じて徳倫理学のキリスト教的体系化にとって決定的な意味をもち、盛期中世に至るまで（典型はトマス・アクィナスの『神学大全』第2-2部の構想と展開）その大枠を規定することになったが、キケロやセネカは直接に名前が言及されるのみならず、実はアンブロシウスの仮面の下に、テキストの深層においても影響を与えているのである。

アウグスティヌスの場合、ストア哲学の影響の最たるものは『教師論』

1) M. L. Colish, *The Stoic Tradition from Antiquity to the Middle Ages*, Leiden, 1990, p. 2-6.

『キリスト教の教え』における記号論 (logica) の領域であろうが、その他にも『神の国』など複数の著作のうちに、最高善と徳、智慧、恩寵と自由意志、情念、そして哲学の役割をめぐる主題が様々に反復・変奏されている。ただしこれらの雑多な問題をどれだけ集約して「アウグスティヌスとストア哲学」の問題に統一的な展望を与えることができるかとなると、なかなか難しい。最近の研究のうち例えばコリッシュはこれらを三種に分類し、

- (甲) ストア哲学の概念を一貫して使用している論題（言語論、記号論、知識論など）の他に、
- (乙) 逆に一貫した使用が見られない場合（神義論、自然法、智者など）と、
- (丙) 思想の「発展」を示している場合とを区別しながら、複眼的に調停を図っている²⁾。

またこれは必ずしも西方教父だけに限定されない問題であるが、ローマ帝政初期のストア派を代表するエピクテトスの『提要』は、すでに古代世界において3-6世紀に教父の間で広く関心と呼び、異教徒でありながら有徳な人物の典型として彼の言行が伝えられた (Origenes, *Contra Celsum*, 6. 2. etc.)。ポリツァーノのラテン語訳以来、16世紀初頭には修道士の手引書としても（ただしごていねいなことに「ソクラテス」の名前が「聖パウロ」に改竄されたうえで！）広く普及したが、エピクテトスの標榜する「自由」の理念は、人間理性の自律的完成と神の恩寵の関係をめぐって、17世紀以降ストア主義の復興と共に毀誉褒貶相半ばし、エリザベス・カーター女史やパスカルの両義的な評価を呼ぶことになる³⁾。またB.ストックが示唆するように、4世紀以降の修道院思想の中で「霊的読書」(lectio divina) の理念が形成されるにあたって、聖書解釈の発展と並んで、エピクテトスの *Diatribes* の理念は一定の重要な役割を果たすことになったのである⁴⁾。

以上のやや長きにわたった方法論的反省をふまえた上で、以下ではより具体的なテキストに即して、問題を微視的に追跡してみたい。

2) Op. cit., p. 143-153.

3) 荻野弘之『マルクス・アウレリウス『自省録』——精神の城塞』岩波書店2009年、58頁。

4) B. Stock, *After Augustine: The Meditative Reader and the Text*, Philadelphia, 2001, p. 101-114.

1 徳目のカタログ

手始めにアウグスティヌスが回心にあたって偶然にも (?) 取って読んだというテキスト (*Conf.* 8. 12. 29) を取りあげてみよう。

「酒宴と酩酊，淫乱と好色，争いと妬みを捨て，主イエス・キリストを身に纏いなさい。欲望を満足させようとして，肉に心を用いてはなりません」(Rom. 13:13-14)⁵⁾。彼にとって「それから先は読もうとせず，また読むに及ばなかった」という。あまりに有名なこの「庭の場面」が果たして史実であったのか，あるいは文学的虚構であったのか，クルセルを嚆矢とする 1960 年代以来の論争は，この場合さして重要ではない。しかし感情の激しい高揚が一転して平安な光のうちに終息するこの回心の頂点をなす聖句が彼にとって決定的な言葉だったのは何故か。仮にこの点に共感を覚えられなければ，『告白録』の読者にとってアウグスティヌスの回心のもつ最終的な意味は，依然として覆われたままではないだろうか。

実はこの聖句は「悪徳表」と呼ばれる類型であり，真正パウロ書簡のうちに 6 箇所ほど数えられる (Rom. 1:29-31, 13:13, ICor. 5:10-11, 6:9-11, IICor. 12:20-21, Gal. 5:19-24)⁶⁾。徳と悪徳を図表 (カタログ) にして見せる例は同時代のユダヤ教文献にも散見されるが，ストア派やペリパトス派にも共通するヘレニズム時代の倫理思想の特徴でもあった⁷⁾。テオフラストス『性格論』は「おとぼけ」(eironeia) や「へつらい」(kolakeia) など悪徳の典型的な行動を活写して興味深い。同時代の小市民に向けられた精緻な人間観察や辛辣な評言は古代のモラリストの面目躍如たるところだが，悪徳の図式化自体はさほど進行していない。とはいえ，すでにアリストテレスには徳／悪徳の図式化の構想が芽生えており (diagramme, E. N. II 3, 1107a33)，実際『エウデモス倫理学』第二巻第三章の写本 (1220b37-1221a12) には中庸としての徳と，超過と不足としての悪徳，計 14 組が図表化されており，講義の際に「板書」のように掲示された可能性を示唆している。これに対してストア派は，快樂・苦痛・欲望・恐怖の「類として

5) 新共同訳による。ただし『告白録』での本箇所の引用は，ギリシア語原文に一層逐語的に対応している。

6) パウロの場合「徳目表」は少ない (II Cor. 6:6, Phil. 4:8) が，特に前者は新約としては例外的にヘレニズム的色彩が濃厚である (佐竹明『ガラテア人への手紙』現代新約注解全書，新教出版社 1974 年，534 頁)。

7) S. Wibbing, *Die Tugend-und Lasterkataloge in Neuen Testament*, Berlin, 1959, p. 87-88.

の情念」を現在／未来にわたる、善・悪へ向かう魂の膨張／収縮として見事に図式化し（Aspasius, *in Arist. E. N.*, SVF 3-386b）要素的感情の複合として多種多様な情念を統一的に理解しようとするスピノザ流「精神の幾何学」の先駆をなしている。

さてこうした新約の悪徳表のうち、最も長大な『ガラテア書』（5. 19-21）の例を見てみよう。ここで挙げられる 15 項目の悪徳は単なる羅列ではなく 4 種類に分類される。

- (甲) 姦淫, 猥褻, 好色
- (乙) 偶像礼拝, 魔術
- (丙) 敵意, 争い, 嫉み, 怒り, 利己心, 不和, 仲間争い, 妬み
- (丁) 泥酔, 酒宴

このうち甲類は性的な逸脱で、婚姻の制度や裸体美術など性道徳に対して比較的寛容だったギリシア＝ローマ文化に対し、イスラエル宗教が厳格な性的モラルに固執していた伝統を反映する。乙類は異教の祭儀に関わるもので、これも宗教的な逸脱といえる。丁類はやはり異教の文化（酒神バックスの祭儀で信徒が陶酔のあげく集団的な乱暴狼藉に及ぶといった非日常的な醜行）に関わる。これに対して丙類は、もはや個人の次元を超えて、分裂や分派など、いずれも愛による一致の反対をなす悪徳で、まさしくガラテアの教会の状況を反映しており、パウロが最も強調したかった点は実はここにあると思われる。

こうしてみれば、アウグスティヌスが読んだ『ロマ書』の悪徳表が、類似の構造をもった『ガラテア書』の長大な悪徳表の正確な縮約版であることは一目瞭然であろう。しかも重要なことに、悪徳表を挟んで「霊と肉との対立」そして「霊（の指導）によって歩む」理念が標榜される。たしかに「欲望」（epithymia）とはストア派の四大情念の一つではあるが、ここでパウロは「誤った認識にもとづく理性への背反」というストア的理解から離れて、ユダヤ的伝統にしたがって「神へ反逆する自己中心的な性向」と読み換えているのである。

さらに「新しい人を着る」（et induite novum hominem, 他の用例は、真正パウロ書簡ではないが Eph. 4:24, Col. 3:9）とは、4 世紀にはすでに洗礼の象徴として理解されるようになっていた（Ambrosius, *De mysteriis* 3. 8, 4. 20）。アウグスティヌスの場合も、初期の『独白録』から晩年の『三位一体論』に至るまで一貫して、神のうちにあって「新生」の象徴であり（*Soliloq.* 1. 1. 3）また「神の似像の再形成」の契機となる重要な引用

である (*De Trinit.* 12. 7. 12. 14. 16. 22)。つまりストア派に代表されるヘレニズム倫理学の徳／悪徳のカタログ化が、同時に「靈に導かれた愛」によって統合されてゆくというパウロ書簡の理念——これがアウグスティヌスにあっても依然として保持されており、そのゆえにこそ、彼の回心によって決定的なテキストとして共鳴したと考えられるのである。

2 ストア派のディアトリバー

ところで前節でみたようなパウロにおけるストア派の影響は、単に思想内容にとどまらない。実はパウロ書簡は現行テキストの通りに書かれたものではなく、元来はもっと短い手紙であったはずの複数の書簡が集成・編集されて成立した、というのが現在では定説になっている。例えば『コリント前後書』は少なくとも長短六通の書簡のパッチワーク（ボルンカム）の産物なのである。

パウロ書簡の様式や文体を問題にする立場から、新約学者 R. ブルトマンは特に *Diatribē* という論述の形式に注目する⁸⁾。*Diatribē* とは元来は広く「時間の過ごし方」を意味する言葉で、そこから「何をして過ごすか」つまり生き方を示す用例が古典期に見られる (*Plat. Ep.* 337e, *Lys.* 204a, *Ap.* 37d)。ヘレニズム期に入ると、もう少し限定して倫理学についての講義や小論を意味するようになり、ゼノンやクレアンテスら初期ストア派の著作の標題でもあったと伝えられるが、とりわけ重要なのは、エピクテトスの『語録』という標題となった点である。エピクテトスは帝政ローマ初期を代表するストア派の思想家で、今日「禁欲的」を意味するストア派のイメージは初期ストア派以上に、彼に負うところが大きい。エピクテトスは新興ヘレニズム都市ニコポリスで学校を開いた職業教師でありながら、ソクラテスの響に倣って著作は残さなかった。だが学生や訪問者を前に語った彼の講話や実例が弟子のアリアノスの筆録によって集成され、『語録』(全8巻のうち4巻分が現存)という標題のもとに伝えられることになった⁹⁾。*Diatribē* とはその意味で「言行録」ではあるのだが、当然ながら三人称で書かれた「論文」ではなく、特定の聴講者や対話者を前にした呼びかけや勧告が多いのが特徴である。一例を挙げれば「君は知らないのか」

8) R. Bultmann, *Der Stil der paulinischen Predigt und die kynisch-stoische Diatribe*, 1910 (Goettingen 1984), p. 13-14.

9) A. Bonhoeffer, *Die Ethik des stoiker Epiktet*, Stuttgart, 1894.

(ouch horas, ouk oides, 1. 4. 16, 3. 23. 9, Plut. *De virt.* 101C), 「見てごらん」(hora, 1. 16. 3, 1. 28. 20, Plut. *De cup. div.* 527D), 「これを忘れてはいけない」(1. 1. 11, 2. 5. 28, Plut. *De tranq.* 468E), 「誑かされるな」(2. 22. 15), 「私はこう言おう」(phemi de, Mus. 16. 19) など。またこれに対応するラテン語の表現 (non vides, vides enim) がセネカの著作にも頻出する (Seneca, *De prov.* 2. 5. 7, *De beat. vit.* 11. 2, 18. 3)。プルトマンは、こうしたディアトリバーに特徴的な表現がパウロ書簡に頻出するところから、思想内容と共に文体の面からもパウロにおけるストア主義の影響を見る。ヘレニズム・ユダヤ教の文化的背景をもったパウロがこうしたストア派に淵源する表現や修辞を無意識のうちに駆使していたとしても不思議ではないだろう。

その意味でも有名なアレオパゴスの演説は、ヘレニズムとヘブライズムの「最初の衝突と挫折」といったような単純な図式には到底収まりきらないのである。

3 4世紀における聖書と修辞の相克

前節でみたように、パウロ書簡における徳／悪徳の理解には、すでに同時代のストア派を含むヘレニズム思想の深甚な影響が刻印されている。パウロ (-67?) とほぼ同時代人のセネカ (前 4?-65) との『往復書簡集』が4世紀末に「発見」され、偽書であるにもかかわらず中世からルネサンスを通じて愛読されたのはこうした下地があった。

『セネカとパウロの往復書簡』は全14編、いずれも短く、互いに懇懇を尽くした儀礼的な挨拶に終始する。文体・思想内容ともにいたって拙劣な文書ではあるが、キリスト教思想におけるセネカの受容史を考える上ではなかなか興味深い問題を含んでいる。この文書はおそらく380年以降に捏造されて一定の読者を得た。特にヒエロニムス『著名者列伝』(Hieronymus, *De viris illustribus* 12, AD392) やアウグスティヌス『書簡』(Augustinus, *Epistula* 153. 14, AD414) で言及されたことから、教会博士たる両教父の権威と共に流布したと思われる¹⁰⁾。

往復書簡のきっかけは、セネカが宮廷の庭園で偶然パウロの友人に遭遇し、そこでパウロの書簡が朗読された際に、彼の倫理的勧告に強い感銘を受けたことで開始される (第一書簡)。セネカは『コリント書』『ガラテア

10) 『セネカ哲学全集4』岩波書店2006年、訳者解説489-491頁。

書』を愛読したこと、また皇帝もその思想に心を動かされたことを伝えるが、半面で「論述の配慮が不足している」としてパウロの文体の欠陥を婉曲に嘆いてみせる（第七書簡）。そこでセネカはパウロに自著『言葉の豊かさ（*copia verborum*）について』（虚構か？）を贈呈する（第九書簡）。最後にパウロは、思索を深めていたセネカに聖霊が下ったことを認め、彼がその雄弁によって宮廷の人士を説得することを勧め、赫々たる宣教の成果を期待して結ばれる（第一四書簡）。

この『往復書簡』が提起する問題は、大きく二点に集約されよう。第一は「ストア派のモラリスト」としてのセネカに対する教父たちの親近感である。セネカの著作に表明された（高官の地位を利用して蓄財に励んだ実生活はともかくとして）禁欲的な態度、神的摂理への信頼、そして書簡という形式を通じた、時に厳しい叱責を含む率直な倫理的勧告——パウロ書簡にも通じるこれらの資質は、セネカがキリスト教の精神に最も近い異教作家であることを遺憾なく示している。そしてこの印象は、4世紀末以降、この往復書簡に言及したヒエロニムスやアウグスティヌスのみならず、すでにテルトゥリアヌス以来のラテン教父たちによって多少とも共有されていた。なかでもラクタンティウスはとりわけセネカを愛読・賞讃して「もし誰かがセネカに神を示していたならば、彼は神を真に崇拝する者となっていたに違いない。智慧の導師を得れば、ゼノンや師ソティオンすら軽蔑しただろう」とまで述べている（Lactantius, *Institutiones divinae*, 6. 24. 14, AD324）。ましてパウロとは、ネロ帝治下のローマという時空を共有している以上、二人が遭遇する事態も十分に想定できよう。つまり「鼠兎の引き倒し」とも思われるこうした期待感こそが、やがて『往復書簡』という私生児を産み落としたのである。

ネロ帝の迫害下にペトロとパウロがローマで共に殉教を遂げた。そしてかつての愛弟子ネロに自決を命じられたセネカも、今やその戦列と墓標に加えられるのである。第一四書簡は、哲学者セネカがパウロ書簡に感動し、書簡を介した精神的交流の結果、聖霊に満たされて使徒として活動する姿を予感させるようにして結ばれる。こうしてタキトゥス描くところの鮮烈なセネカの自決の様子は、往復書簡の匿名の著者によって、いまや福音宣教の殉教者として脚色されることになる。キリスト教と古代文学を調和させようとする15世紀ルネサンスの胎動の中で、ボッカチオをはじめ「キリスト教徒セネカ」の伝説が流布する際にも、この書簡は少なからぬ影響を与えたのである。

第二の問題は、これと密接に関連する宗教の「文体」の問題である。第七書簡で匿名の著者は「高邁な思想に相応しい威厳ある修辭が不足している」として、セネカにパウロの文体への不満を表明させる。だがこの不満は4世紀の教父たちの間ですでに共有されていたように思われる。アウグスティヌスはカルタゴでの修学時代にキケロの『ホルテンシウス』に感銘を受け、「そこにキリストの名が見当たらないことに物足りなさを感じ」ながらも、その直後に聖書にふれて「キケロの荘重さには較べようもない」と感じた (*Conf.* 3. 5. 9) し、ヒエロニムスもまた思想と表現の乖離を問題にしている (*Ep.* 22. 30)。

そもそもラテン語作家にとって、文体の問題は決定的な重要性を担っていた。キケロは息子マルクスに宛てた『義務論』の冒頭で、弁論家の本分として「適切かつ明晰、しかも優雅に語る」修練に一生を費やしてきたことを誇る。そして「弁舌の迫力の点で勝る弁論書」と、哲学書の「整然として抑制の利いた文体」とを対比させ、自らがラテン語作家としてこの両方に熟達していることを自賛してやまない (*De officiis* 1. 1. 2-4)。ギリシアの文人たちは、パレロンのデメトリオスもデモステネスも、アリストテレスやイソクラテスも、誰一人としてこうした「文体の統合」を果たしえなかったのである。その意味でもキケロがプラトンを最も高く評価するのは、何にもまして思想と文体——哲学と文学の統合という点にある。

キケロやセネカといった、ストア派の影響を強く受けたラテン語の名文は、その思想内容のみならず文体の魅力によっても、文学的素養に恵まれたラテン教父たちを魅了した。ストア哲学の受容にあたり、こうした文学性の面を見逃すことはできない。そしておそらくこの点が、同時代のギリシア教父のストア派受容との相違を最も強く示す面であろう。

4 二つの『義務論』——その間隙と重複

さて以上はやや迂回路をとって、文体や論述形式の点からストア哲学と教父の関係を見てきた。本節ではいよいよラテン教父におけるストア哲学の影響関係を正面から取り上げてみたい。それは同名の著作『義務論』(*De officiis*)を挟んだキケロとアンブロシウスの関係である¹¹⁾。

さて、膨大な『神学大全』の中でもあまり参観される機会のない徳目で

11) 両者の関係をめぐっては『中世思想原典集成4 初期ラテン教父』平凡社1999年、アンブロシウス『エクサメロン』訳者解説534-543頁参照。

あるが「寛厚」(liberalitas)をめぐって、トマス・アクィナスはアンブロシウス『義務論』を盛んに参照している(S. *Th.* II-II, q. 117. a. 5, a. 6)。これは元来「物惜しみしない心の宏さ、気前のよさ」を表わす自由的徳性(eleutheriotes)であり、アリストテレスにあっては「財貨をめぐる中庸」とされており(E. *N.* IV 1, 1119b22-1122a17; E. *E.* III 4, 1131b27-1132a18)、またその限り正義の徳とは独立に考察されるはずの徳目であった。だがトマスは第五項において寛厚は「正義の部分」であると主張して、正義との密接な関係を強調する。そしてこの論拠となるのがアンブロシウス『義務論』の引用、すなわち「正義は人間の紐帯(societas)に関係づけられている。しかるに紐帯は二つの観点に分けられる。正義(iustitia)と親切(beneficentia)、すなわちそれは寛厚(liberalitas)と恵み深さ(benignitas)とも呼ばれる」(*De officiis*, I. 28. 130)という規定であった。ところがこのアンブロシウスの一文は実は、キケロの『義務論』(*De officiis*, I. 7. 20)を逐語的になぞっているのだ。この事実はある重要な点を示唆する。キケロにとって正義こそ「美德の最大の光輝であり、善き人を名指す指標となる理念」であった。トマスがどの程度キケロの著作をじかに読んでいたかは定かではない。だがともすれば観照的なギリシア的徳目に対して、ローマ的な実践性を強調してやまぬキケロのラテン語の用語法に引きつけられる形で、トマスは寛厚の徳をめぐって(古典期アテナイのポリス社会に準拠した)アリストテレスの路線から、いまや(地中海の覇権国家ローマを前提にした)ストア派の理念に向けて舵を切ることになったのである。

キケロによれば「我々は自分のためだけに生まれてきたわけではなく、我々の生まれの一部は祖国に、一部は友人たちに所有権がある」からだ(7. 22)。ところがアンブロシウスは正義の孝養(pietas)は何よりもまず神に、次いで祖国に、更に両親に、最後に万人に対して向けられるべきことを強調する(28. 126)。つまりソロモン王によれば「神への孝養こそが智慧の初め」だからである(Prov. 1:7, 2:5)。かくしてストア派に特徴的な、親近性(oikeiosis)の原理を中核に同心円的な構造をもつ自己保存の体系は、「祖国、友人」を強調するキケロから、アンブロシウスによって神を新たな原理として再構築され、枢要徳(智慧、正義、節制、勇気)は同じく神への孝養を基礎として統合されることになる。

キケロは更に続けて次のように述べる。「ストア派が考えるように、地上に生じるものはすべて人間の役にたつように生み出され、人も人のために生まれて、お互い同士助け合うことができる」¹²⁾。宇宙自然の合目的性、

そして理性による人間同士の紐帯，人間中心主義を標榜するストア派の理念が鮮やかに浮かび上がる。ところがこの行文（類似の表現は *De off.* 2. 11-16, *De fin.* 3. 67, *De nat. deo.* 2. 37）をアンブロシウスは再び逐語的に反復しているのだ。マデックによれば，ここではキケロ以外に別の源泉を詮索する必要はない¹³⁾。それほどまでにアンブロシウスは徹底してキケロを下敷にしているのだが，しかしここから先，両者はやや唐突に分岐した道を辿ることになる。

続けてキケロは「こうしたことからわれわれは自然を導き手として従わねばならない」（7. 22）とする。自然学と倫理学の密接な関係のもとに，「自然と一致して生きる」というストア派の理想の残響を聴くことは容易であろう。他方アンブロシウスは，キケロの唱導する「導き手としての自然」の方は黙殺して，突然「だがこうした言明をわれわれの聖書からでなければ一体どこから思いついたのだろうか」（28. 132）と宣言する。つまり彼は，人間を中心に据えた自然の高度な合目的性という事実は認めながらも，その根拠をめぐってキリスト教的な理念へと改鑄しようとする。すなわちここで「我々にかたどり，我々に似せて人を造ろう。そして海の魚，空の鳥，家畜，地の獣，地を這うものすべてを支配させよう」（Gen. 1: 26），「あなたは御手によって造られたものをすべて治めるようにその足もとに置かれました」（Ps. 8: 7-9），「人間にあう助け手を造ろう」（Gen. 2: 18）という三つの聖句を引用するのだが，ここにはギリシア文学・哲学の思想や理念は，実は律法に示されたモーセの創案からの剽窃であるとする，教父の中に根強く見られる思想（あるいは偏見）が影を落としている。

いずれにせよ，この例からも明らかなように，アンブロシウスはキケロに寄り添うようにして，ストア派の理念に深く影響されたその着想を吸収しながら，その根拠や帰結に関しては，随所で聖書を援用することで，大胆にキリスト教的な理念へと改造していく。こうしてラテン中世のキリスト教神学は，とりわけ「正戦」その他ローマ的起源をもつ徳目や価値に関して，アンブロシウスという経路を通じて陰に陽にキケロと接続していくことになったのである。

12) M. Teatard, *St. Ambroise Les Devoire*, Livre 1, Paris, 1984, p. 253. 高橋宏幸訳『キケロ一選集 9』岩波書店 1999 年。

13) G. Madec, *St. Augustine et la philosophie*, Paris, 1974, p. 140.